

被災地で感じたこと&対震パーツの効果的な使い方①

三村信幸

あの「東日本大震災」から3年が過ぎました。徐々に復興の兆しは見えていますが、大津波の爪跡は瓦礫を移動しただけで、新しい街づくりには程遠い状況にあります。この3年の間被害に遭った方々のご苦労は計り知れないことで、言葉も見つかりません。

年を経た震災の日の前後には、大地震の恐怖や対策の必要性が多くのメディアに登場します。昨今は30年以内に首都圏でM7級の直下型地震が70%の確率で発生するとの予想が発表され、太平洋の南海トラフを震源とするM9・1の巨大地震が起きた場合の被害範囲や被害額の予想が公表されました。そこには必ず「備えがあれば被害も半減する」と対策の必要性を強調しています。

私達も個人として、企業（事業所）として対策を考えなくてはならないと思います。

全く想像もしなかった東日本大震

災で、私達は命の大切さと安心・安全な住まい造りの必要性を感じました。震災当時はテレビ、新聞などのマスコミの報道から私達が目にすることは、津波の脅威であり、原発事故の目に見えない恐怖でした。建物の多くは津波に流され跡形もなく、地震の揺れで倒壊した建物の実態は今となっても把握できないと思います。もし大津波に襲われなかったら、地震による倒壊家屋、倒壊は免れたが部屋の中の状況はどうだったのか？

私は昨年5月中旬に水戸まで行った折に北茨城まで足を延ばし、7月初めには秋田の帰りに、仙台に立ち寄り、塩釜、松島を回りました。時間の関係で十分に見ることができませんでしたが、復興が進んでいる地域と全くと言っていいくらい、手の付けられていない所があるように感じました。元気な所もあれば、本当に寂しそうな風景も目にしました。

仮設住宅の横を通った時に、お年寄りの方が一人で植木鉢の花に手を加えている姿を目にしました。しばらく見ていましたが何故か声をかけられなかった。全国で義援金だ、寄付金だと言って集めても、被害者にとだけ届け役立ったのか疑問にも感じました。

一方元気を取り戻した地区、人々は、見た目では普段と変わらない生活を目指して頑張っている姿があった。仙台市の最も賑やかなアーケード街は多く若人や観光客が行き交い賑わっていた。

夜、小さな居酒屋で地酒と地元のお菓子を注文しながらおかみさんや大将と話をすると地元のお客さんも加わり「おっかねかった」と言いながら、自分の家はどうなった、親戚どうなったなどと話してくれました。が、どこでも最後には「今さら何言ってもどうにもならねえ。自分たちは生きていたのだから、これからも

一生懸命頑張らねば」と言う。何か教えられたような気がしました。

仙台市や揺れの大きかった地域のマンションや戸建て住宅の被害も甚大だったようです。千葉県や東京都でも液状化による建物の被害や室内の家具の転倒などで部屋の中がメチャクチャになった事例を耳にしますと他人事では済まされません。水戸での友人の話、仙台で見聞したこと、改めて命の大切さを実感し、何時自分も災害に遭遇するかわからないので、自分で命を守る術を、対策をやらねばならないと感じました。

震災後ホームセンターの防災コーナーに大勢の人が殺到した現状を見て、住まいの防災対策に関心が高まっていることを実感しました。これが一時期だけではなく今年になっても、人数は少なくなりましたが続けているようで、まずは「自分の身は自分で守る」と言う意識が根強くなっている気がします。

その意識の中に命を守るための重要なことが二つあります。一つは「避難路の確保」であり、もう一つは「三日分の飲料水と食料の備蓄」です。次回これらについて詳しくお話しします。